

虞美人草—マクベス—猿蟹合戦—人形の家

Junko Higasa 2013.10.14

ウィリアム・シェイクスピアが描く『マクベス』に登場する魔女たち。自分の欲のために魔女に助言を求めたマクベス。その伏線にあるエリザベス I 世が定めた「魔女禁止令」に、後のイングランド国王：ジェイムズ I 世が追加した項目は【魔女との間に「助言・契約・雇用・接待」が生じた時は死刑】というものだそうだ。すると人間は大抵これに当てはまるらしい。そこで思い浮かぶのが芥川龍之介の『猿蟹合戦』である。『とにかく猿と戦ったが最後、蟹は必ず天下のために殺されることだけは事実である。語を天下の読者に寄す。君たちも大抵蟹なんですよ』—猿は国家と法律、蟹は国民と人情。これを芥川の師：夏目漱石に遡って見れば『行人』に表れる「蟹の所有」、『虞美人草』の糸子の裁縫道具に表れる「縮緬の御申」（さるかに合戦の伏線）ということになる。

英文学者としてシェイクスピアを研究した作家：夏目漱石—師の著した伏線を見事に読み解く弟子：芥川龍之介。人道上の罪を犯して、それを正当化したことによって幽霊・民衆・自意識に復讐されたマクベス夫妻。人道上の罪を犯しても契約上の罪を犯していないが復讐された『虞美人草』の藤尾と小野さん。人道上の罪を犯したが契約上の罪は犯していない猿に復讐を企てて死刑にされた蟹。

「法か人情か」はイプセンの『人形の家』でも追及された問題であり、国家・国民間の隔たりでもある。